

| | | | | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|----|----|--|----|---|
| 09 | 1970⇔2020 未来へ 愛媛県立美術館設立50周年記念展 9月1日(火)～ 11月6日(金) | 10 | 没後20年 真鍋博2020 10月1日(木)～ 11月29日(日) | 11 | 名古屋市美術館所蔵 エコール・ド・パリの色と形 11月14日(土)～ 2021年1月31日(日) | 12 | 01 | 大広重展 東海道五十三次と雪月花 叙情の世界 2021年1月16日(土)～ 3月21日(日) | 02 | 岩合光昭 いよねこ 猫と旅する写真展 2021年2月11日(木・祝)～ 3月28日(日) |
|----|---|----|---|----|---|----|----|--|----|---|

没後20年

真鍋博 2020

10月1日(木)～11月29日(日) 新館2階、常設展示室1、2、3

真鍋博《岡本綺堂「あま酒売り」原画部分》
1961 当館蔵



真鍋博《潜水艦カシオペア》原画 1964



真鍋博《魚》部分 1956

企画展



真鍋博《ものがたり日本の神話5天の岩戸その一》原画 1965

1932年(昭和7)、愛媛県宇摩郡別子山村(現・新居浜市)に生まれた真鍋博はイラストレーションの世界を舞台に様々な作品を世に送りだしました。1964年(昭和39)の東京オリンピックや1970年(昭和45)の大阪万博など、わが国の高度経済成長と呼応しつつ新たなデザインの可能性を切り開いた真鍋の画業を、没後20年という節目の年に振り返っていきます。

真鍋博という名前を、星新一の書籍の装幀を担当していたことによりご存知の方も多いのではないでしょうか。「ポッコちゃん」や「悪魔のいる天国」など、その魅力は現在も色あせていません。しかしながら、そういった一義的表現では捉えきれないほど彼の画業は幅広いものでした。

例えば、彼が新居浜西高等学校に通っていた頃から精力的に取り組んでいたのは、実は油絵でした。上京後も現在の多摩美術大学にて油彩の勉強を続けていくものの、様々な出会いにより、彼の興味は次第に広がっていきます。アンクルトリスの生みの親として有名な柳原良平の影響を受けつつ制作されたアニメーションなどは、その最たるものです。

自らの作品をより多くの人に見てもらいたい——この信念のもとに彼はイラストの世界へと足を踏みだしていくわけですが、その過渡期の作品群には彼の優れた問題意識と様々な葛藤がこめられています。



真鍋博《筒井康隆「七瀬ふたたび」》原画 1972



真鍋博《(アーチェリー)》1971年頃

本展では、そういった大学在籍時の初期作品から、星新一や筒井康隆などの装幀の原画にいたるまで、約600点の作品を展示いたします。真鍋の大規模な展覧会が行われるのは、2004年に東京ステーションギャラリーなどで開催された「真鍋博展」以来、16年ぶりのこととなります。どうぞご期待ください。(五味 俊晶)

特別展

1970⇔2020 未来へ

愛媛県立美術館
設立50周年記念展
2020年9月1日(火)～11月6日(金)
新館1階、企画展示室

愛媛県美術館の前身である愛媛県立美術館は、昭和45年(1970)9月1日に開館し、今年で50周年を迎えます。館の設計は三座建築事務所の創設者のひとりで、今治市出身の徳永正三。市内の第二尋常高等小学校時代の同級生には、丹下健三がいました。丹下が戦後に手掛けた愛媛県民館が北側に建っており、同級生同士による建築物が隣接することとなったのです。

県立美術館の設立は、愛媛県美術会を中心として、作品を発表する場を求めていた作家たちの悲願でもありました。多くの人々による熱心な設立運動を経て実現した、県の美術の発展における大きな第一歩であったと言えるでしょう。

当時の美術界は、県展を中心としながら、高階重紀ら抽象表現を追究した作家たちが「愛媛現代美術家集団」を結成し、森堯茂や坪内晃幸ら意欲的な前衛造形表現を試みた作家たちが、堀之内公園で「愛媛野外美術展」を実施するなど、正に創作表現への熱いエネルギーに満ちていました。

本展では、開館を祝して開催され、県ゆかりの作家たち約300名の作品を一堂に紹介した「郷土作家展」や、「愛媛野外美術展」に代表される前衛美術運動、また多くの支援を受けてその礎を築き始めた美術館の初期コレクションなど、開館前後の県立美術館を取り巻く状況についてご紹介します。

本展が当時の熱気に溢れた芸術運動を広く知らしめ、そして、現代を生きる私たちがその遺産を未来へと引き継ぎ、今後さらなる発展が遂げられることを願っています。(杉山 はるか)



高尾浩一郎
《第1回愛媛野外美術展》
1969



正面外観(竣工当時)



重信文雄
《開館記念郷土作家展》1970



4月に着任した美術館では、本県出身の真鍋博・杉浦非水・畦地梅太郎の日本有数のコレクションをはじめ、モネ・セザンヌ・ボナール等の所蔵品に深く感動。「みる・つくる・まなぶ」を楽しむ美術館を発信していきます。(濱松 一良)

名古屋市美術館所蔵

エコール・ド・パリの色と形

[前期] 2020年11月14日(土)~12月20日(日) [後期] 12月22日(火)~2021年1月31日(日) ※前期・後期で展示替えがございます。

新館1階、企画展示室

20世紀エコール・ド・パリの作品に関しては国内有数の所蔵品を誇る名古屋市美術館。改修工事のため休館になることから、その名品群を一堂で紹介する展覧会が実現いたしました。

エコール・ド・パリ(パリ派)とは、狭義には、両大戦間期の国際都市パリで「蜂の巣」と呼ばれた集合住宅を拠点に活動し、具象的な傾向の作風を示した、ユダヤ系を中心とする異邦人の作家達を指します。「蜂の巣」に出入りしたフランス人作家達を含める場合もあります。彼らは個性の際立つ表現主義的で抒情的なカラリストとみなされがちですが、実際には、刺激に充ちた環境のもとで様々なイズムに時に近付き時に離れて、常に色と形を変化させていました。

本展は、そうしたエコール・ド・パリとその周辺の美術の流動的な諸相を見詰め直す実験的な試みです。「色」と「形」の2章構成をとり、それぞれ「明るい色、強烈な色」「暗い色、地味な色」「主調色、独自色」、「プリミティヴィズムとグラフィズム」「セザンヌとキュビズム」「クラシシズムとマニエリスム」のテーマのもとに作品を展覧することで、個々の作家の色と形の特徴を浮かび上がらせると共に、作家の心境の変化により色と形が変貌してゆく様を明らかにします。

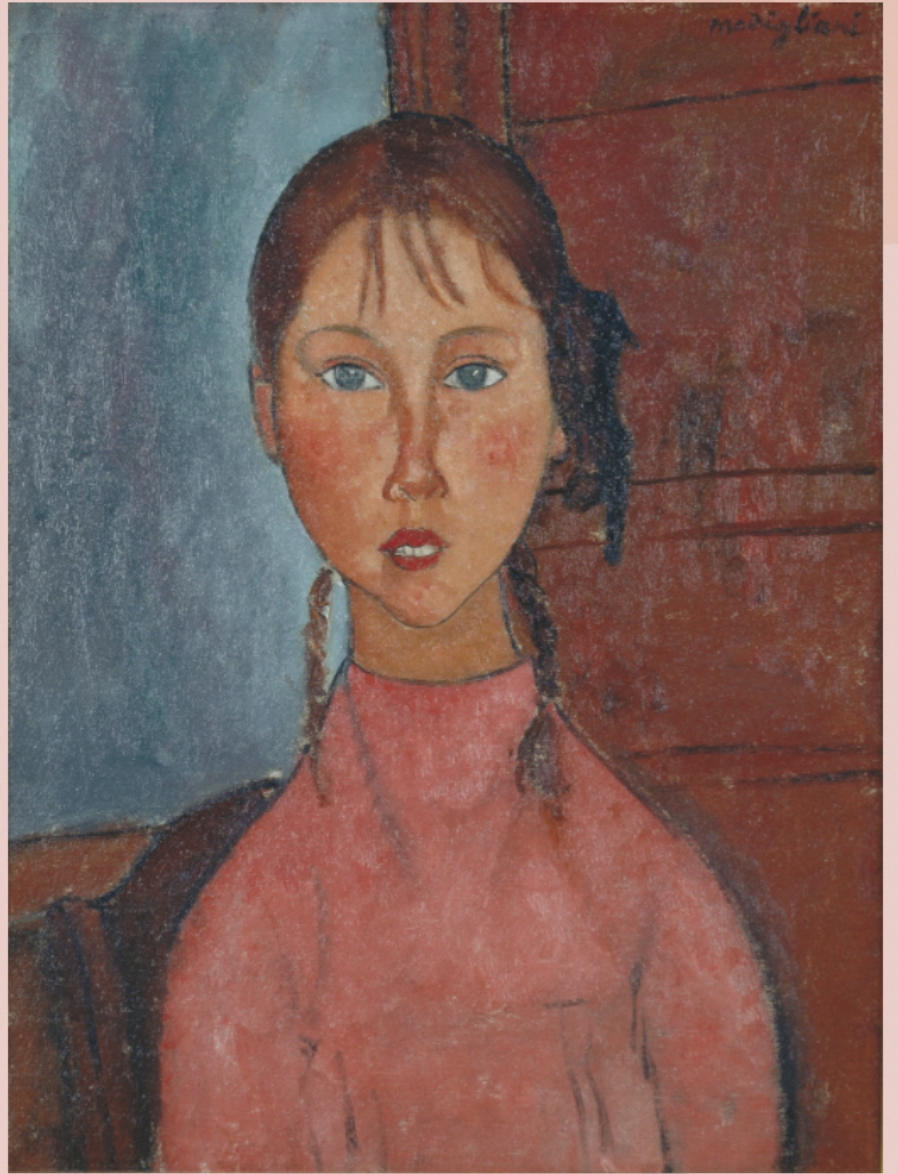


ジュール・パスキン《クララとジュヌヴィエーヴ》1925 名古屋市美術館蔵

良質の名古屋市美術館コレクションに当館の代表的作品を加えて織り成すひとときの夢の世界。藝術の都パリで活動し、前衛と古典のはざまを揺れ動き、その経験を生涯の糧とした、悩める天才達の作品に繰り広げられる色と形の多様な美をお楽しみください。(武田信孝)



アメデオ・モディリアーニ
《立つ裸婦(カリアティードのための習作)》
1911-12頃 名古屋市美術館蔵



アメデオ・モディリアーニ《おさげ髪の少女》1918頃 名古屋市美術館蔵

「面白い」ということ

好きな言葉のひとつに「面白い」という言葉があります。この「面白い」の語源、民俗学の本には次のように紹介されています。

…囲炉裏を囲んだ人間関係は、現在と未来へつながる人間関係の確かめの場。火を囲み、食をたのしみ、よもやま話に興ずる人々の顔を白い火影が照らしている。互いを見つめ、互いの存在をよるこびあう。そんな愉しさを「面(おもて)が白い」「面白い」というのである…(出典:大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登編。『図説民俗探訪事典』山川出版社、p83、1994)

今、世界中の美術館や博物館で、新型コロナウイルスによる展覧会の中止や延期、休館や閉館のニュースが相次いでいます。それはミュージアムが「人々が集い、語り、そして実際にモノをみる(触れる)ことを大切にしてきた場所」だからです。その大前提が脅かされています。もちろん「今は」お互いの距離を保つことが一番です。

こういった状況下の愛媛県美術館ですが、美術や「みる」ことの面白さを皆さんにお伝えしたい! そんな思いから、4月より、スタッフによる手作りの動画「けんぴのワークショップmini!」のHPなどでの配信や、民間放送局とタイアップした企画展、美術館コレクション展の紹介番組が始まりました。

いつか必ず、美術館に集う皆さんとお互いの存在を寿ぎ合いたい。そう願いながら、これまでも増して、より豊かな美術館像を模索しています。(鈴木有紀)



スタッフによる動画制作風景



色コレクション・赤(「けんぴのワークショップmini!」より)



どこからちゃんねる(「けんぴのワークショップmini!」より)



今後の展覧会スケジュール

新型コロナウイルスの影響により、当初公表していた展覧会スケジュールが、以下のとおり変更となりました。(長井 健)

- 1970⇔2020 未来へ 愛媛県立美術館設立50周年記念 9月1日(火)~11月6日(金)
- 没後20年 真綱博2020 10月1日(木)~11月29日(日)
- 名古屋市美術館所蔵 エコール・ド・パリの色と形 11月14日(土)~2021年1月31日(日)
- 大広重展 東海道五十三次と雪月花 叙情の世界 2021年1月16日(土)~3月21日(日)
- 岩合光昭 いよねこ 猫と旅する写真展 2021年2月11日(木・祝)~3月28日(日)
- 追悼・水木しげる ゲゲゲの人生展 ⇒ 来年夏季に開催延期



マジメミキャン



4月から近代洋画担当で参りました青木朋子です。本年度は「大広重展」を担当致します。福岡出身で愛媛にはこの春初めて来ました。まだまだ知らないことばかりですが、楽しんで学んでいきたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:00(入室は17:30まで)
※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。
- 休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29~1/3が休館日)



編集後記

今年度から『カンフォロ』の発行を担当することになり、4色刷りに変えてみました。実際の作品と印刷物は全く異なるものではありませんが、モノの魅力が少しでも伝わる冊子になっていけば嬉しいです。(五味 俊昌)